

(株)海洋堂 代表取締役社長

# 宮脇

MIYAWAKI  
Shuichi

# 修一

さんに伺いました

(後編)

聞き手

溝淵 利明  
編集委員

[writer] 駒崎 文男  
[photo] 河合 隆富

土建屋フィギュアとか、労働者フィギュアに興味があるんですよ。トラクターもモーターフとしては現代の戦車みたいなものですから。

2008年7月17日(木) (株)海洋堂本社

模型屋として始まった「海洋堂」。それまで社会的地位の低かったプラモデルを自慢できるものになりたい、との思いをもち同社を成長させた宮脇氏。先月号では同社の歴史からチョコエッグのブームについて伺いましたが、後編の今月は、宮脇氏の考える「ものづくり」について伺います。

## 大人が堂々と模型を買いえる時代になった

**宮脇**——今年がガレージキット25周年になります。1980年代前半は取材でも奇人変人扱いで、真剣に25歳の男が「ゴジラの指の数の違い」とか、「キングゴジラはですね」とか「初代ゴジラはこうで」とか話していると、「夢のあるお仕事ですね」と一言で片付けられて終わっていた。それが今や、

僕らも一緒になって組んでいる村上隆氏のフィギュアが16億円で、ニューヨークでオークションされる時代になった。大人が堂々と模型を買いえるようになり、世の中に「模型おもしろいですわ」とか「ゴジラ、カッコエエでしょう」と、言える時代になった。それは、全部僕らのお陰やで、と言いたいんです。

## 模型の疲れを模型で取る人間がない

——市民権を得たというのはその通りだと思います。逆に、その頃買っていた子どもたちが今大人になって、模型屋さんが大人の集う場所になりつつあるのかなと思うのです。

**宮脇**——ところが今、模型屋さんが潰れて、ほとんどなくなっているんです。1960年代半ば、うちがプラモデル屋を始めた頃は、全国にプラモデルメーカーだけでも50社くらいあったんですよ。それだけのメーカーが毎週新製品を出していて、

それがたくさん売れていた。模型屋さんの数も一つの小学校の校区に5、6軒くらいあった。それが全部潰れて、二代目も継がない。僕は模型屋の二代目で「海洋堂じゃ!」と言ってやっていますけど、模型店の二代目で頑張っている人なんて周りにおらへん。模型屋さんで、情熱をもって、模型に対して本気で向かっている業界の人間がおらへん。僕らは模型の疲れは模型で取っているんですよ。たとえば、カメラマンの方は取材に来て、僕らを撮っていますけど、半分くらいの方は趣味も写真で風景とかを撮って、カメラの疲れをカメラで取るわけです。そういう方はいっぱいいるわけです。それが、模型の疲れを模型で取る人間なんて、この業界でおらへん。プラモデルは減るべくして減んだんじゃないと思います。

## 海洋堂のものづくりの強さ

——話を聞いていて、ものづくりに対して、



### 宮脇 修一(みやわき・しゅういち)さん プロフィール

1957年大阪府生まれ。海洋堂は、父・修が模型店として1964年、大阪府守口市に創業。1985年、株式会社化に伴い専務に就任、2004年に同社社長に就任。「チョコエッグ」の大ヒットによりフィギュアを一般に広めた。

情熱をもってつくることの大切さを感じます。

**宮脇**——海洋堂のやっていることは、東京なら大田区の金型職人の旋盤工や、大阪なら東大の板金工のように、血の滲むような努力で、技をきわめた職人技ではないんですよ。ずば抜けた才能をみんなもっているけど、その才能も別に勉強したわけではない。好きなことだけを延々やり続けて、ここまでできた。この間も水族館の飼育員の方が、うちの松村しのぶがつくったコバンザメを見て、このポーズがどうやったらできるんですかとうなっていました。魚のプロ、飼育員が見て、うなるヒレの流れがある。普通の動物や魚のフィギュアは、今までは写真を見ながらつくっていたわけです。そうではなくて、

松村は自分が動物オタクだけに、コバンザメはこういうポーズを取るといのがわかっていった。そういう人間だからこそ、玄人をうならせる最後のちよつとしたヒレのしぐさがつくれた。うちには、美少女なり、動物なり、戦車なりといういろいろな造形作家がいますけど、本気で好きな人間がおるといのは、海洋堂のものづくりの強さがあるところだと思います。

### 土木にわれわれの造形集団のような集団があってもいい

——ものづくりに対する情熱を感じますね。そういうものをわれわれの業界ももって、ものを

つくることに対してもっと前向きになってほしいと思います。

**宮脇**——建設で工務店的なものがあるんやったら、われわれのような造形集団ではないですけど、道路集団というような道づくりをきわめた集団みたいなものがあるのもいいのではないのでしょうか。

僕らとしては、土建屋フィギュアとか、労働者フィギュアに興味があり、つくりたいと思っています。トラクターや建機などいろいろつくれば、それはモチーフとしては現代の戦車みたいなものですから。昔、橋のプラモデルはありましたけど、ダムのプラモデルとかあってもいいですよ。男の子は基本的に乗り物、巨大な建造物というのは好きはずやから。海洋堂のキャッチフレーズに「創るモノは夜空にきらめく星の数ほど無限にある」というのがあるんです。なんでもつくればいい。港とかダムとか、そんなのがいっぱいあったらエエのにな、と思うんですけどね。

僕らはこれまでコンビニをはじめ、ドリンクのキャンペーンとか、本屋さんの付録とか、いろいろなところでいろいろな形にしてフィギュアや立体物を提供していききましたけど、それは布教活動のようなもので、これからは模型の楽しみや立体物の楽しみを広げていきたいと思っています。

——本日はお忙しいなか貴重なお話をいただき、ありがとうございました。